

教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

エペソ人への手紙一章二三節

2016(28)年 週 報

8月21日

聖
言

「夫は妻のかしら」

第3 聖日

第 3469号

なぜなら、キリストが教会のかしらであって、ご自身がそのからだの救い主であられるように、夫は妻のかしらであるからです。エペソ 5:23

主の弟子となる⑰

第二課 バプテスマ——次のステップ

使徒たちは信者とその家族にバプテスマを施しましたが、救いをもたらすものは信仰であるということを強調しました。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたは救われます。」(使徒一六ノ壱拾四以降、二九ノ二三節比較参照)。しかし、もしバプテスマなしで、信じて救われるのであれば、なぜ教会はバプテスマを要求するのでしょうか。なぜなら、バプテスマはイエスの要求の一つだからです。イエスは、すべての国の人々を弟子とし、父・子・聖霊の御名によってバプテスマを授けるように弟子たちを遣わされました(マタイ二八ノ一九)。ですから、バプテスマを要求しない教会があるとすれば、また、バプテスマを授けてくれるように要求しないでバプテスマを受けていないクリスチャンがいるとするならば、この点で矛盾していることとなります。バプテスマを行う根本的な理由は、私たちの主であるイエス・キリストを喜ばせることなのです。

(CIBTE主の弟子より)

イエス・キリスト聖成伝道教会・東洋聖書神学院・聖成基督教団

牧師 山本 稔 〒653-0812 兵庫県神戸市長田区長田町1丁目2番6号

電話：FAX (078) 691-1419 郵便口座番号 01170-3-20374

<http://jchec.org/>

minoru_yamamoto@hotmail.co.jp メール m7-inoru@ezweb.ne.jp

「キリストの心を心とせよ」

「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られものです。」(ピリピ二ノ五)

「キリストの心を心とせよ」とは文語訳であります。新改訳では「あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られものです。」と原文に忠実に訳されているようですが、意味合いです。私には、やはり文語約の方が、ぴったりのと思います。私たちが、普段心がけていなければならぬのは、信仰が浅くても深くても、目的はキリストの心にどれだけ近づけるかだと思います。知識が増えても、熱心になっても、キリストの心にどれだけ近づけるかが問題ではないかと思えます。このピリピ二章にはそれに近づく道が書かれてあります。キリストの心を持つ事は、一章から見ると、あなたがたは一致を保ち、同じ愛の心を持ち、心を合わせ、志を一つにし、何事にも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。自分のことだけでなく、他の人のことを顧みなさい。と言われています。その後で、キリストの中にもみられるものです。ということは、これがキリストの心ではないかということです。全てではないのですが、持っておられたということ。キリストの心を心として、キリストの心を知らなければ、心として持つ事はできません。キリストについては、四福音書に書かれています。マタイ伝を取っても、イエス様は公の生涯は三〇歳からでしたが、三年の間、病人をいやし、悪霊を追い出し、又山では神の国について語り、舟の上では、嵐になっても風と湖をわかりつけられると静まりました。ツアートの患者もいやし、その人とに相応しい方法で語り、病人をいやされました。ということは、誰に對し

ても、同じように接していかねばならないことです。短い言葉のなかに全て含まれていると思います。そして、最後にユダに売られて十字架につけられました。罪を犯したのではなく、人間の罪を負うためでした。ユダや人のねたみによってついに、裁判にも勝って十字架につけられることになりました。しかし、キリストが来られたのは、人間の罪の赦しのためであるので、どのような方法であれ、それが実行されました。極悪人が受ける十字架であり、これは人間の心に焼き付けるものであると思えます。その他の方法もあつたでしょうが、神様も承認され実行に移されたのです。だから、私たちも、自分たちの考えや方法ではなく、キリストがどう考え、思っているかをしっかりと考えて行動していかないと、いけないと思えます。自分の心に照らし合わせて、点検をして、キリスト・イエスの心を心として行きたいものです。